宇治市民大学講座

市民の手による、市民と地域のための大学

主催　宇治市民大学運営スタッフ会
共催　宇治市生涯学習センター

令和７年度
後期 講座

歴史文学塾

◎ハガキによる事前申込制

◆受講料
原則、五回分二千八百円を前払い
（各回単独の受講可。受講料は、千円）

◆定員　先着　百五十名

◆申込み
募集期間　七月二十日～八月十日
ハガキに「歴史文学塾」、〒、住所、氏名（ふりがな）、年齢、電話番号をご記入の上、お申し込みください。

◆問合せ・ハガキ送り先
℡090-4280-2571
宇治市民大学歴史文学塾事務局　播摩
〒611-0025
宇治市神明宮東97-5

ご注意
生涯学習センター専用の駐車場はありません

テーマ　「京都から見る幕末」

講師　佛教大学名誉教授　青山　忠正さん

9/13(土)	近代外交の成立 ～華夷秩序から万国対峙への転換～
10/ 4(土)	大阪湾の海防
10/25(土)	武家の名前と官位
11/15(土)	町人から武士へ
1/10(土)	鳥羽・伏見の戦い

講座時間　10時～11時半（但し、最終回1/10（土）は10時～12時）

●講座のねらい、ポイント　＊裏面に各演題ごとの「ひとこと」を記載。

安政５年(1858)を画期として、京都は政治の中心地になりました。アメリカとの通商条約調印をめぐり、朝廷と幕府が対立したことがきっかけです。朝廷は、薩摩・長州をはじめ、西日本の大藩と結びつき、幕府に対抗する政治勢力となります。その状況に対応するため、14代将軍家茂は文久３年(1863)、230年ぶりの将軍上洛を決行します。慶応４年(1868)正月、幕府が終焉を迎えるまでの激動の政局を、いくつかの異なる視点から通観してみましょう。

青山　忠正

会場　宇治市生涯学習センター

歴史文学塾

宇治市民大学 令和７年度後期講座

講師からのひとこと

青山　忠正さん

9/13　「近代外交の成立～華夷秩序から万国対峙への転換～」

ペリー来航後、嘉永７年（1854）に成立した「日米和親条約」は、は近代でいう「条約」ではなく、「開国」を認めたものでもありません。中華の国、「皇国」日本から見れば、それはアメリカ船の下田・函館への寄港を許した約束で、「夷狄」への恩恵供与にあたります。ところが、４年後に具体化する通商条約は、「皇国」と「夷狄」の区別を無視して自由貿易を行おうとするものでした。勅許を求められた天子・公家衆は、当然ながら猛反対します。

10/４　「大阪湾の海防」

文久２年（1862)、朝廷は「攘夷」方針を明らかにし、勅使三条実美が江戸に下って、将軍に攘夷実行を督促します。折からイギリス艦隊が大坂湾に侵入するとの情報を踏まえ、幕府は、湾の海岸防備を強化するため、沿岸各地に砲台を建設し、また兵庫港を蒸気軍艦の基地にしようと計画します。これらの計画は未完成に終わりますが、現代の大阪湾沿岸には、当時をしのばせる多くの史蹟が残ります。

10/25　「武家の名前と官位」

大坂湾砲台の建設にあたった人物として、勝海舟の名が知られています。「海舟」は号で、当時の史料には「勝麟太郎」あるいは、「勝安房守（あわのかみ)」のように記されます。時代をさかのぼって、名奉行、遠山の金さんは、「遠山左衛門尉」（さえもんのじょう）が公式の名前。これらは「官途名」（かんとめい）というもので、本来は朝廷から叙任された官位に基づくものです。武家の名前の不思議さと、近代の「姓名」について考えます。

11/15　「町人から武士へ」

寺田喜三郎は、もとは京都の呉服商「桔梗屋」の息子でした。寺田家は二代前から、越後新発田（しばた）の大名、溝口家の呉服御用をつとめ、家臣として扶持を給されていました。文久３年（1863)、喜三郎は正規の家臣に取り立てられ、京都留守居の重職に任ぜられて、いやおうなしに、激動する政局の渦の中に巻き込まれます。慶応３年（1867）10月には、二条城の大広間で老中板倉勝静から、将軍慶喜による「政権」返上の意思を伝えられました。異色の武士、喜三郎の書き残した克明な記録から往時を振り返ります。

1/10　「鳥羽・伏見の戦い」

慶応３年12月（1868）の政変で、「摂関・幕府等廃絶」が宣言された後、薩長はじめ新政権から徳川家の排除をめざす勢力と、あくまでも徳川家の権力を維持しようとする慶喜らとの間で、虚々実々の駆け引きが続きます。翌年正月３日、両勢力はついに鳥羽・伏見で開戦します。その敗戦によって、徳川方は最終的に政治的な敗北を喫するわけです。前後の経過と戦いの様相を、史蹟の画像を踏まえながら、改めて考えてみましょう。